リレー・エッセイＮＯ．１５８

自然破壊は永遠に

後藤隆徳

バランスと棲み分け・・・

そもそも、「自然保護」とはおかしな言葉だ。本来、人間が「自然破壊」を始めなければ、生まれて来なかった言葉だろう。

「自然保護」の言葉があるのは、人間が「自然破壊」を行っている「証」と言える。

従って、「自然破壊」がなければ、「自然保護」は、必要なかったと言える。

とは言え、人間が生活の営みを行って行く以上、ある程度の「自然・自然物の利用・活用」をしなければ、やっていけないことは事実。

ビルを建設するには、セメント・砂利が必要になる。これらは決して、人工的には作れない。山を削り、河原を掘って初めてビルが建つ。

昔、北沢峠に林道を通すか、通さないかで運動が起き、署名活動を行った。北沢峠は原始からの貴重な森林が残っている山域だ。せめて峠は「トンネル」にしたかった。

アラスカで、太古から白熊が住んでいるテリトリーに人間の住居が建設される。その住宅街に昔からの「熊の通り道」があった。昔から熊は本能的にそこを通っているから、他を「迂回」することはない。

結果、熊とのトラブルが絶えない。始めから、そんな所に住宅を建設しなければ、問題は発生しなかった。

要するに、「自然」と「人間」の付き合い・折り合いは、前者なら破壊でなく、「適度な利用・活用バランス」、後者は「棲み分け」である。

持ち込まない・・・

登山の場合、人間が上らなければ問題は発生しない。しかし、それは現実的に難しい。ならばどうするか。

上ってもいいがルールを守る。そして出来ることはやる。
まずは、山に反自然的なものを持ち込まないことである。だが実際、我々は知らない間に持ち込んでいる場合が多い。例えば「靴底に付着した種子」がある。
尾瀬はオオバコ・ハルサキヤマガラシ等、本来尾瀬にない植物が大量にはびこる。
これらは自然保護団体が毎年大量（例えば２ｔ）に除去を行っているが、それを知っている登山者は少ない。
靴に付着した種子を落とすためにマットを設置しているが、こんな方法は決定的でないから問題が発生している。立山でも同じことが起きている。
また、「動物の連れ込み」もある。ここでは主に「犬連れ」が問題になっている。
犬の毛や糞には高山地帯に存在しない病原菌・大腸菌が存在する。特に高山地帯の象徴の「雷鳥」は、これらに抵抗力がなく、取り返しの付かない結果を生んでいる。
また、むやみに山中大声で吼えたりした場合、そこの動物に決してよい影響は与えないだろう。
以上の件は簡単に山の入れる車道・林道の存在も関連する問題である。

持ち帰る・・・・・

現在、ゴミはおおむね持ち帰っているようだ。ただ、タバコの吸殻はまだ時々見かける。
タバコの残骸問題はフイルターでる。あれはアセテートという人工繊維だから、いつまでも登山道に残る。
山を己の家・庭と考えれば、安易に「ポイ捨て」は出来ないと思うが残念だ。
トイレ問題は依然として残っている。特に大量の登山者が訪れる山域の「小」は深刻な問題だ。
一時、静岡県連も携帯トイレ普及に努めたが、指導者が変わったりで、今はやや不熱心。
麗峰も公開バスハイクで、参加者に呼びかけ配布し、啓蒙を計った。それは素晴らしくいいことだった。
ただ日常、自分たちが上る山でも、それを実践しなければ他人への「言葉」も生きてこない。

会も来期は予算を取り、会員に携帯トイレを配布することも一案だ。

持ち去らない・・・

時々、山に上らない人が、「山に行ったら何を持って来るんだ」と言う。

「衣食足りて礼節を知る」で、最近は少なくなったような気がするが、どうも昔は、山に出かけたら、必ず「土産」を持って来るのが、当たり前と思っていたようだ。

何年か前の日曜日、櫛形山で「ホテイアツモリソウ」を見た。それは、道端に見事に咲き誇っていた。

ワイフが見たいと言うので、火曜日再び訪れたが、そこにはもう、あの華麗な花は無かった。

その時、環境庁のレンジャーがいて、目立つ花で「盗掘」が心配だから、目立たないように、花を摘んでしまおうと、言っていたが、皆さんの楽しみだからの「温情」が、結果的に仇となってしまった。

花が見事だから、手元に置きたいのは人情だが、盗掘者は「お金」になる。

この問題は、「購入者」がいるから発生する。「お金」にならなければ、盗掘は減る。マニアは、１０万円でも購入すると言われる。

この解決には、いわゆる「不買」（不買運動）が大切。買わない・購入者がいない・欲しがらない→購入者がいないから、お金にならない→結果、盗掘が減る。

の図式だが、実際はうまく展開していないのが、実情だろう。それほど甘くない。

あるスキー場のトップの売店には、「ホテイアツモリソウ」が見事に展示してある。噂では、ほとんどが「盗掘されたもの」と言われている。

標高が高いこのスキー場では、盗掘し移植後も、問題なく育って行く。

信州の国道沿いで、「山野草大安売り店」の看板を見るにつけ、果たして、それらが全て「実生」から育てたものか、疑いの眼になるのは、果たして私だけだろうか。

（以下、次号につづく）